



Title	The association between constipation and subsequent risk of atopic dermatitis in children: the Japan Environment and Children' s Study
Author(s)	高野, 良彦
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96267
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	高野 良彦
論文題名 Title	The association between constipation and subsequent risk of atopic dermatitis in children: the Japan Environment and Children's Study (小児における便秘とその後のアトピー性皮膚炎発症リスクとの関連：エコチル研究)
論文内容の要旨	
〔目的(Purpose)〕 アトピー性皮膚炎の子どもの腸内細菌叢にはその多様性が失われたディスバイオーシスという状態になっていると報告されており、ディスバイオーシスは便秘にも関連している。乳幼児で便秘とアトピー性皮膚炎との関連を調べた研究はこれまで存在しない。本研究は、乳幼児において便秘とアトピー性皮膚炎との関連を調べることを目的とした。	
〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 エコチル調査参加者104,062人のデータを用いた。1歳時の排便頻度を曝露要因とし、1週間に2回以下の排便回数を便秘と定義した。国際標準の質問票への回答と、医師によるアトピー性皮膚炎診断のいずれか、もしくは双方を満たした場合をアトピー性皮膚炎と定義した。1.5歳から3歳までのアトピー性皮膚炎の累積発症数をアウトカムとした。1歳時の便秘と3歳までのアトピー性皮膚炎累積発症リスクとの関連について多変量ロジスティック回帰分析を用いて検討した。 62,777人の解析対象者の中で1.5歳から3歳までにアトピー性皮膚炎を発症したのは14,188人(22.6%)だった。1歳時点ですべて便秘であった児は、ほぼ毎日排便する児に比べて、3歳までにアトピー性皮膚炎を発症するオッズ比は1.18(95%信頼区間: 1.01-1.38)であった。同様の関連は統計学的に有意ではなかったものの2歳まで、及び1.5歳までの発症においても認められた。	
〔総括(Conclusion)〕 1歳時の便秘は、3歳までのアトピー性皮膚炎発症リスクの上昇と関連していた。アトピー性皮膚炎は3歳以降にも発症する可能性があるため、3歳以降での関連についても今後調べる必要があると考えられる。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 高野 良彦

論文審査担当者	(職)		氏 名		審査結果
	主査	大阪大学教授	相沢 友孝		
	副査	大阪大学教授	川崎 良一		
	副査	大阪大学教授	藤 本 三		

論文審査の結果の要旨

アトピー性皮膚炎 (AD) は乳幼児期から増悪と寛解を繰り返す疾患である。また便秘も乳幼児期にしばしば認められる疾患で、両疾患ともに腸内細菌叢の多様性が失われた *dysbiosis* という状態と関連すると言われている。しかしながら、双方の関連性についてはこれまで十分に研究されていない。本研究では、大規模な出生コホート研究であるエコチル調査のデータを用いて便秘とADの発症との関連を多変量ロジスティック回帰分析により検討し、1歳時に便秘を有する児が有しない児に比べてその後3歳までのAD発症リスクが高いことを示した。本研究の結果により、早期に便秘を見つけることで早期にADを同定して介入できる可能性が示唆され、便秘を介したADの治療・予防に役立つ研究へ発展する契機となりうる。

したがって、本論文は学位の授与に値すると考えられる。